

日本社会心理学会会報

214号



発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>
編集・制作 広報委員会(担当常任理事:宮本聡介)

2017年7月7日

第29期役員あいさつ

会報213号で既報のとおり、2017年4月より第29期体制が発足しました。浦光博会長と6名の常任理事から会員の皆様へ、学会全体および諸活動の今後の里程を含めたごあいさつを申し上げます。

会長就任あいさつ

浦光博

このたびの役員選挙で日本社会心理学会の会長に選出され、2年間の任期を務めることとなりました。このような場合、私は自らに何らかのミッションを課して表明することにはしているのですが、今回の場合、どうもうまく行きません。本学会が現在、活況期にあるように見える一方で、停滞期にあるかのようにも見えるからです。何に重点を置き、どの方向に舵を切れば良いのかが正直、よく分からないのです。

本学会の会員の研究活動は現在、かつてないほどの活況を呈しています。まず、研究の国際化が大きく進んでいます。多くの会員が優れた研究成果を次々と国際誌に投稿し、多くの論文が掲載されるようになりました。高 Impact Factor の雑誌への掲載論文も少なくありません。年次大会は、毎回600名から700名を超える会員が参加し(これは全会員数の3分の1以上が毎年参加していることを意味します)、活発な研究発表が行われています。シンポジウムやワークショップも盛況です。さらに、春の方法論セミナーには本学会の会員のみならず他領域からも多くの方が参加していて、これもやはり大盛況と言える状況にあります。

その一方で、機関誌である「[社会心理学研究](#)」への投稿論文数は減少傾向にあります。また採択率が40%を下回る状況が続いていることもあって、このままでは年間3号の刊行が危ぶまれるようになる可能性もなきにしもあらずです。さらに、会員数の伸びも鈍化しています。長年1800名台を維持してきたのですが、2016年度末には1800名をわずかに割り込みました。年度が変わって新規の入会者があつたため1800名台を回復しましたが、高止まり状況にあることは否めません。年次大会の開催校が決まりにくいという事態も相変わらず続いています。また、学会の役員の平均年齢は決して低いわけではなく、次世代の学会運営を担う人材の輩出という点で、不安を覚えます。

このような状況をどう評価すべきかについては、いろいろな見方があるだろうと思います。会員が学会活動を通じて研究の水準を高めた結果として研究の国際化が進んだのだと捉えれば、それは学会活動のポジティブな成果として評価されるべきでしょう。また、年次大会やセミナーの盛況ぶりに目を向ければ、それらが会員の切磋琢磨の場として十分に機能していることを示していると評価できます。これらのことは、本学会が学術団体としてある種の成熟期を迎えていることの現れであると言えるかもしれません。

そうであるなら、このままで良いという考えもあるように思えます。さまざまな活動が活況を呈し、会員の研究の水準が高まっている。この状況をさらに推し進めるために、学会として特に若手・中堅の研究者が切磋琢磨できる場を提供し続けよう。そのためにはベテランたちが裏方として役員を担い、年次大会の開催にも尽力する。これは、学術団体にとってある種の理想的な形であるのかもしれない。

しかし、会員の研究の水準が高まった結果として、機関誌を素通りして国際誌への投稿が行われるようになったのかもしれない。そうであれば、この現状は学会活動の空洞化、あるいは研究の水準の2極分化と捉えることができるかもしれません。また、学会発表件数がいくら多くてもそれらの全てが国際誌に掲載されるわけではありません。そして、機関誌への投稿論文の6割以上が採択に至らないという現状に目を向けると、もしかしたら生じているのは研究の水準の2極分化ではなく、平均的な水準の低下なのかもしれません。会員数が高止り状況にある要因の1つに退会者の多さがあるのですが、これは本学会が多様な会員に魅力ある活動を提供できていないことの表れなのかもしれません。さらに、大会の引き受け先が決まりにくい状況が続いていることは、フリーライド現象の

現れと見ることもできます。ベテランたちが裏方として学会を支えることは学術団体としての理想的な形なのかもしれませんが、実は最近の本学会で主要な役割を担ってきたベテランたちの多くは、若手・中堅と呼ばれた頃から本学会を含む諸学会で役員として活躍してきた人たちです。これらのことを見ると、本学会は成熟期という名の停滞期にあるという評価も可能かもしれません。

ぐだぐだと書き連ねましたが、なんとなくミッションが見えてきたように思います。先端的な研究活動の水準を維持しさらに高めるとともに、2極分化の解消のために底上げの仕組みを作ること。入会者を増やし、退会者を減らすために、多様なニーズに応えられる新たな取り組みを考えること。年次大会の開催をはじめとする種々の学会活動や学会運営に関わって生じるコストをできる限り下げようような仕組みを作ること。といったところでしょうか。

これらのミッションを果たしてどれくらい実現できるのかについては、実はあまり心配していません。素晴らしい理事会、常任理事会メンバーがいるからです。学界の第一線でご自身も優れた業績を上げ続けておられるメンバーたちと手を携え、学会のさらなる発展の一助になれるよう精進して参ります。みなさま、よろしくご協力のほどお願い申し上げます。(うら みつひろ・追手門大学)

事務局担当

西村 太志

このたび事務局を担当することとなりました西村太志(広島国際大学)です。1,800名規模の会員を擁する団体の運営をするということで、業務をきちんとこなせるのか不安ですが、諸先生方のお力をお借りして遂行していきたいと思っています。幸いにして、研究活動や学会活動について経験豊富な先生方と一緒に仕事をさせていただくことになりました。頼るべきところは頼り、役員経験のない若輩者の意見をいえるときにはいえる形で業務をこなしていきたいと思っています。

事務局の運営は、国際文献社にほとんど委託されており、事務局担当常任理事は、その確認をすることが主な仕事です。国際文献社、特に本学会担当の古川佳奈さんは長年本学会の事務局運営をサポートいただいています。今期も多大なサポートをお願いします。ことに今期は、これまで数期とは異なり、事務局と担当常任理事が地理的に離れている(東京-東広島、最近ではほぼ東京地区の先生が事務局担当でした)ため、時に調整が難しくなることもあるかもしれませんが、迅速に進めていきたいと思っています。また、事務局幹事を田崎優里さん(広島大学大学院教育学研究科)にお願いしました。まだD1の院生です。彼女を介して若手研究者の皆さんにも学会の現状に関心を持っていただければ幸いです。

引き継ぎに際しては、前任の藤島喜嗣先生に大変お世話になりました。引き継ぎの資料を見るにつけ、これだけの業務を的確にこなされてきたことに敬意を示すばかりです。今はまだ遠い未来のことのようにも思えますが、任期が終わる時に藤島先生のように的確に引き継ぎができるように、日々の業務の整理や処理を行っていききたいと思います。

事務局の業務は多岐にわたりますが、予算案の作成と日常的な決算の確認、会員の入退会処理、対外的な依頼等への判断が大きな業務です。これらの多くはルーティンワークで処理されていきます。その意味では、「楽」な業務だといえるでしょう。しかしながら、全てがルーティン処理できるわけではなく、調整や確認、整理が必要なときもあります。その意味では「煩雑」な業務ともいえます。これらの業務が会員全ての方の目に触れる「目立つ」業務という訳ではありません。また学会運営は、会員の皆様からの会費によってほぼ全てが成り立っており、限られた予算で運営しております。そのため現在行っている各種事業の規模や形態の見直しも、現在の財政状況では必要になると思われれます。しかし、学会というコミュニティが安定的に維持されるためにも、事務局業務へのご協力を会員の皆様をお願いする所存です。

現在私が勤務する環境は、地方の中規模私立大学で、担当大学院は臨床心理の専門職学位課程(修士研究がなく、実務家養成が主目的)です。在籍する大学院生に、社会心理学的な研究指導を行う機会は非常に少ないです。これまでに役員を務めてこられた先生方とは、この点ではかなり環境が異なっていると思います。また、公認心理師法案も制定され、制度の詳細も決まりつつある中、内外共にカリキュラムや組織、仕事内容に大きな変化が伴うことが予想されます。心理学に対する社会のニーズも変化していくと思います。このような中で、学会という実態があるようで明確ではない、関心の近い研究者の緩やかなつながりの組織の運営に、自分は何ができるのか考えこんでしまうこともあります。しかし、このような背景を持つ者が事務局を担当することで、社会心理学会に貢献できることもあると思い、微力ですが日々の事務局業務に取り組んでいきます。社会心理学研究の活性化や、社会心理学がこれまで以上に「社会」に貢献できる学問分野となることの一助になれば幸いです。

2年間、何卒よろしくお願い申し上げます。

(にしむら たかし・広島国際大学)

編集担当

岡 隆

緊急事態です。『社会心理学研究』第33巻第1号が発行できません。例年通りの8月に発行するためには、5月末までに掲載論文が決定されていなければなりません。組版や校正などに3か月ほどかかるからです。そして、その5月末までに掲載が決定している論文は、資料論文1篇のみです。従前は、1号当たり6篇を目途に編集が続けられてきたようですが、それには遠く及びませんし、背表紙に文字を入れることができません。

今期の編集委員会は、この4月から稼働しましたが、このような緊急事態を受けて、やむなく2か月発行を延期することを決断いたしました。すでに掲載決定がなされている論文の著者の方々、また、書評をご執筆いただいた方々には、なにとぞご寛恕のほどお願い申し上げます。論文につきましては、前期の編集委員会のご尽力によりJ-STAGEでの早期公開が軌道にのっていますので、それがせめてもの救いです。

しかし、この2か月、7月までに編集委員会として何ができるかについては、はなはだ心もとない思いです。というのは、学会誌は会員のみなさまの自発的なご協力に基づいて編集され発行されていますので、編集委員会にできることは極めて限られています。まずは、会員のみなさまに、ご協力をお願いするしかありません。会員のみなさまからのご投稿は、前期の編集委員会で減少したというご報告をいただいています。この減少については、前々期までは、原著論文を資料論文に変更するなどジャンルを変更したときに、新しい投稿とみなしてカウントしていたのを、前期では、同一の投稿とカウントしたことによるところが大きいと思います。それでも、少なくとも増加しているということはないようです。今期に入り2か月半ほどですが、すでに12篇のご投稿をいただいています。なお一層のご協力を賜りますようお願い申し上げます。(なお、採択率については、前期に投稿された多くの論文が、現在も審査中ですので算出できていません。)

この間、主査、審査者の先生方には、ご審査を急いでいただくようお願いしてきたところですが、また、審査期間が超過しているケースを手作業で洗い出して、個別にもお願いしてきたところですが、そのなかで、現在のほぼ自動化された査読システムの問題もいくつか発見されました。たとえば、メールアドレスを変更された方が、その変更をご登録いただいておらず、メールが届いていなかったということがありました。また、私自身もかつて審査期間を超過して申し訳ないことをしたことがありますが、査読システムからのメールがスパムメールに自動振り分けされていて、それに気づかないということもあるようです。今後も、審査期間や修正期間など期間のあるものについては、ひとつひとつ細かくチェックしていくつもりではありますが、審査の先生方、また、投稿された先生方も、それぞれの期間について何かご懸念がございましたら、お手数をおかけしますが、編集委員長や編集事務局までお問い合わせくださると幸いです。

本来ならば冒頭で申し上げるところですが、第29期の編集を担当することになりました岡隆(日本大学)です。本会での編集担当は不慣れなものですので、何かと行き届かない点もあろうと存じますが、会員のみなさま、編集委員の先生方、学会賞選考委員の先生方、また、編集幹事の山本真菜さん(大妻女子大学)、編集事務局の高橋尚子さん(国際文献社)、多くの方々のお力をお借りして、何とかこの危機を乗り越えたいと存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。(おか たかし・日本大学)

研究支援担当

唐沢 かおり

この4月より研究支援担当常任理事となりました唐沢かおりです。研究支援担当常任理事は、今年度から新たに設けられたものですが、主には渉外担当常任理事の仕事を引き継いでいます。そのひとつが、「大学院生・若手研究者海外学会発表支援制度」の運用です。今年度はすでに選考を終え、最終的に計6名の大学院生・若手研究者の方々に対して、海外学会発表にかかわる渡航費用の支援を決定いたしました。国際化が言われて久しい現状のなか、若手研究者の方々の国際レベルで活躍を支える制度として、これまでも運用されております。次回以降も若手会員の皆様の積極的なご応募をお願いいたしますとともに、制度のあり方につきましても、ご意見を頂戴できればと考えております。

渉外担当から引き継いだもうひとつの仕事は、日本心理学諸学会連合に関することです。浦会長とともに、社員総会に出席することになりますが、すでにご存知のように、国家資格としての公認心理師が動き出そうとしている中、連合での議論や資格をめぐる動向を把握し、会員の皆様にお伝えしていくこと、社会心理学のコミュニティとして、われわれが関わる研究領域の意義を訴えていくことの重要性を認識しています。

また、今回の常任理事の職掌の変更に伴い、「若手研究者奨励賞」の選考につきましても、学会活動担当常任理事から私のほうへと引き継いでおります。こちらは、すでに本年度の募集要項がHPにアップされております。使途について相当柔軟な制度になっておりますので、応募資格をお持ちの皆様方は、奮ってご応募ください。すぐれた研究計画のご提案を楽しみにお待ちしております。

す。

さて、研究支援については、上述のように若手の方々を対象とした制度が確立しております。一方で、これらの制度の効果の検証、改善や新たな取り組みの必要、また「若手よりは少し上」の層に属する研究者の方々に対する研究支援の可能性など、考えるべき課題がいくつかあるとも考えています。これからの2年間、仕事をしていくに当たりまして、ぜひ皆様方から多くのご意見をいただき、それに基づいて努力してまいりたいと存じます。よろしく願いいたします。

(からさわ かおり・東京大学)

広報担当

宮本 聡介

このたび広報担当常任理事となりました、明治学院大学の宮本です。幸いなことに、過去に4年間、本学会の広報委員を務めたことがあるので、どんな仕事待ち受けているのか、おおよそのイメージはついていました。ただ、本学会が情報社会の波に乗り続けるために幾つもの新しい取り組みを進めてきたため、私が現役委員の頃にはなかった広報活動が新たに展開しています。ひとえに前任の三浦麻子先生を中心とする広報委員の先生がたのご努力によるものです。

社会心理学会の広報活動で長い歴史を誇る(?)のは会報の作成です。役員選挙の結果速報、新役員の挨拶、学会の準備状況・学会当日の様子、各種セミナーの紹介、各賞の選考結果報告などを中心に年4回発行されています。メールニュースの配信も重要な広報活動の1つです。学会、研究会等の開催情報を中心に、配信依頼に応じて、手続きを進めています。そして、今や社会心理学会活動に関する情報発信の重要拠点となっているのが学会の公式 Web サイトと後述する日本社会心理学会広報委員会 Web サイトです。これらの Web サイトにアクセスすれば、社会心理学会に関するたいがいのことはわかるのではないかと思います。これら Web サイトの管理・運営も広報委員会の重要な役目となっています。

ここ数年の間に急ピッチで整備された社会心理学会広報委員会 Web サイトについても少し触れておきたいと思います。社会心理学に関連する研究の動向をいち早く紹介するために、先代の広報委員の皆さんが中心となって立ち上げたサイトです。社会心理学会員が執筆した社会心理学関連の書籍を紹介する「社会心理学の本棚」、学会員が海外の研究雑誌に投稿し受理された論文を紹介する「国際論文データベース」、社会心理学のコンテンツを扱った世界の動画を紹介する「動画で見る社会心理学」、また、日本国内で開催されている研究会の紹介、国内で社会心理学を学べる大学の紹介など、盛りだくさんのコンテンツがアップされています。ツイッターとも連動させ、幅広く情報を発信しています。

Web サイトだけでもかなりの情報を有しており、実のところ、私一人では追いつけていない作業がたくさんあります。そこでこれから2年間の広報活動を支えていただくために、4人の方に委員をお願いしました。尾崎由佳さん(東洋大学)、縄田健悟さん(福岡大学)は2期3年目のベテランです。今年度から新たに武田美亜さん(青山学院女子短期大学)、藤桂さん(筑波大学)に広報委員に加わっていただくことにしました。私を含め総勢5名で本学会の広報活動を支えて行きたいと思っています。ただ、私自身はアイデアマンではありませんし、新しいことを広報活動に盛り込んで、賑やかに展開してゆくというキャラではないと思っています。まずはこれまでに積み上げられてきた先人の努力を無にしないよう、地盤固めを進めたいと思っています。余裕ができれば、新しいこともほんの少しだけ、と思っています。2年間、どうぞよろしくお願いいたします。

(みやもと そうすけ・明治学院大学)

大会運営担当

坂田 桐子

前期に引き続き、今期も大会運営担当を務めさせていただくことになりました。大会運営委員会のミッションは、大会開催校候補を探すことのほか、大会開催校が目指す大会を実現できるよう、効果的なサポートを提供すること、また大会運営のあり方を短期的・中長期的に検討することです。

大会開催校の選定は年々困難になっていますが、その原因の1つは、参加者数が600~700名に達する大規模な学会であること、またその一方ですべてを業者に任せることができるほどに潤沢な予算は得られにくい、という点にあるようです。大規模であるために、大教室がない大学やスタッフが少ない大学では、開催を躊躇されることが多いのが現状です。この点を踏まえて、歴代の大会運営委員会では、大教室が無くても開催できる方法や、できるだけ効率化して開催校の労力を低減する方法、また財政的に無理のない開催方法を模索してきました。前期の大会運営委員会では、大会開催校にとって役立つ情報の収集に努め、過去の大会に関する各種データ(参加者数、発表数、総会参加者人数、必要な教室の数、等々)の一覧を作成し、過去の大会開催マニュアル等を集めました。また、大会開催校の事情や希望に合わせた柔軟な大会運営が可能になるよう、『大会運営に関する申し合わせ』

を改訂しました。しかし、それでも開催校選定の困難さが解消されたわけではありません。開催校の負担を軽減できるよう、今期も引き続き、臨機応変かつ柔軟な対応をモットーに活動してまいりたいと思います。また、今後、会員の皆様に大会開催のご相談やお願いをさせていただくことがあるかもしれませんが、その際は、できるだけ前向きにご対応いただければ幸いです。

幸いなことに、前期に引き続き、今期も頼もしい方々に大会運営委員をお引き受けいただくことができました。前期から引き続き樋口匡貴先生(上智大学)、今期から新たに結城雅樹先生(北海道大学)、小川一美先生(愛知淑徳大学)、内田由紀子先生(京都大学)です。その他に、第58回(2017年)大会の開催校から小宮あすか先生(広島大学)、第59回(2018年)大会の開催校から浦光博先生と東正訓先生(追手門学院大学)に加わっていただきました。大会運営幹事を王璋さん(広島大学大学院博士課程後期)にお願いし、総勢9名で年次大会の開催に取り組んで参ります。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。(さかた きりこ・広島大学)

学会活動担当

工藤恵理子

学会活動を担当させていただくことになりました。これまでの学会活動は、年1回の公開シンポジウムの開催と若手研究者奨励賞の募集・選考・授与が主な活動内容でしたが、今期から、その内容を大きく変更することとなりました。具体的には、27期、28期の2期に渡って、春の方法論セミナーや、若手向けの合宿などの新たな催しを企画、実施して下さった新規事業委員会の「新規事業」の看板を外し、学会活動委員会が、会員のみなさまに向けた催しの企画実施を担当する委員会として新たに出発することになりました。

新規事業委員会は、常に刺激的な内容の春の方法論セミナーを企画、開催し、夏の合宿や、大会前日企画を通じて若手会員に国内外で活躍する研究者と直に研究交流を経験する場をつくり、私たち会員にたいへん貴重でスリリングな機会を提供してくださいました。今期からは、学会活動委員会が新規事業委員会のスピリットを引き継ぎ、“時々の学術動向と需要に応じて、時宜にかなった内容の企画の立案と実施”を目指して参ります。

今年度の活動に関しましては、セミナーの開催を計画しております。内容についてはこれから委員会で検討して参ります。決まり次第、メールニュースなどでアナウンスして参りますのでどうぞよろしくお願い申し上げます。これまでの春の方法論セミナーは多数の来場者があり、その上 Ustream での視聴者も多くあり、まさに時宜にかなった企画で私たち会員を魅了するものでした(加えて非会員の方のご来場数も非常に多くありました)。今期につきましては、担当者はいささか頼りないところですが、強力な委員の先生方のお力を借りて、よい企画を考えてゆきたいと思ひます。また、このような企画をというご要望がありましたら、ご意見をいただければ幸いです。

企画の立案、実施においては、会員のみなさまにご協力をお願いすることも多く出てくると思ひます。その際は、何卒ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

(くどう えりこ・東京女子大学)

春の方法論セミナー参加記「社会心理学者は電気ベイズの夢をみるか」

平石 界

数年前に、社会心理学会の会報で、膨大なデータが取れるようになって嬉しい半面、手にした巨大なデータをどう扱ったら良いものか呆然としている、という話を書いた。それから、東に分位点帰帰こそ正義との言葉があればいそいと quantreg パッケージをインストールし、西にマルチレベル分析くらい基本でしょうとの声あれば水玉本と Mplus の購入書類を作成し、と右往左往してきたが、相変わらず事態の解決の糸口はなかなか見つからない。そうした中、遂には都の西北にまでベイズ維新の旗が上がったと聞きつけ、叡智を賜らんと四谷まで出かけたのが 2017 年 3 月のことであった。

集会の場で何が語られたのか、ここで多くを述べるつもりはない。興味のある向きは、広報委員会の面々に感謝の言葉を唱えつつ、アップされた動画を各々閲覧されたい。かねての方法論セミナーの例に漏れず充実した会であったから、今からでも視聴して損のないことは保証する。

そうは言っても少しは内容についても触れたい。セミナーは「そもそもベイズを学ぶ必要があるのか？自分にとって役立つのか？・・・ベイズ・モデリングの意義とその位置づけを、理解していただくこと」という目的にそって的確に構成されており、半日のレクチャーを受けた結果として筆者は、ベイズの勉強は後にしよう結論づけた。後ろ向きではなはだ恐縮だが、人間一人の知力と体力と時間には限界があり、何から勉強すべきか優先順位をつけざるを得ない以上、このようなこともある。その理由を説明して

たい。

セミナーの宣伝文にある通り、ベイジアン・モデリングの魅力は、複雑なモデルに対してもパラメータ推定ができることである。そのメッセージは明確に伝わった。では、そのモデルをどのように作ったら良いのだろうか。そして、そもそもモデルを作る理由は何だろうか。いや、そもそも「モデル」とはどのような意味であろうか。

大辞林には「問題とする事象(対象や諸関係)を模倣し、類比・単純化したもの」という解説があり、これは私の実感にかなり近い。それでは、なぜ社会心理学者は、現象を類比・単純化しようとするのか。そうしないと人間の脳には理解できないからではないか、という疑念が筆者にはある。人間社会における諸現象の根本に何らかのシンプルな法則が存在するという信念など、特に持っていないのではないだろうか。もしこの疑念が正しければ、モデリングとはすなわち、複雑すぎてそのまま生で見せられても人間には理解できない膨大な情報から、重要そうなものを抽出する作業ということになる。それは歴史家やエスノグラファーが個人の才覚によって行う仕事を、天才に頼らず、統計というツールを用いて凡人が行う営みに思える。筆者の周囲では進化シミュレーションを指して「貧者の数学」と呼ぶことがある。同じく「貧者の質的研究」が、モデリングの実際なのかもしれない。

「貧者の・・・」などと書いたが、そうした研究方法を貶める意図は特にない。個人的意見としてはむしろ、個人の天才より凡人の集合知に信頼をおいており、それはお前が凡人に過ぎないからだろうと言われれば、まさしくその通りと開き直るのである。問題は、社会心理学者が現象に対峙する時に、その背景にシンプルな法則が存在するという信念を持っているか否か、である。もしそんなものは信じていないと言うのであれば、人間の脳という限界のある情報処理システムに合うようにするためだけに現象を単純化して記述することに、どれほどの意味があるのだろうか。

つまりは人工知能のことである。Alpha 碁が人間の名人3人を立て続けに破り引退したのが、2017年5月である。如何に複雑極まるゲームと言えど、2つの情報処理システムが、定められたルールの下、限定された空間内で、同じ目標に向かって勝負するという囲碁の世界は、それぞれに異なった目標を持った3人以上の人間が相互作用し、しかもメンバーの入れ替わりや集団サイズの変化すら頻繁に起こる現実社会と比べれば、まだまだ単純に思える。そして、その囲碁においてすら、一人の人間の脳(それも選り抜きの鍛え上げられた脳)は、機械の情報処理能力に敵わないようなのである。その程度のシステムに合うように情報を取捨選択圧縮することの意味は、当該のシステムが「納得する」こと以外に何かあるのだろうか。もしモデリングの目的が記述だけでなく予測にあるのだとしたら、機械に任せたいほうが良いのではないだろうか？

翻って、よりシンプルな法則が存在すると考えているならば、どうなるだろうか(筆者は、その可能性をまだ捨て切っていない)。その場合には、理論から導かれる予測を検証するためには、結局のところ、ノイズを出来る限り排除した「実験操作や介入」を用いる必要があるのではないだろうか。

断っておくが、筆者は囲碁を全く知らない。人工知能についても、これから勉強しようと思っているところである。ここに書いていることは完璧な誤解に基づいている可能性が多分にある。それだからこそ、まずはベイズより機械学習のなんたるかを勉強する必要があるだろう。それが充実した一日を終え、そして本稿を準備するまでに筆者が得た結論である。言うまでもないが、このような結論に至ることができたのも、また、春の方法論セミナーのお陰である。企画を担当された広報委員会の皆さん、当日の講師の皆さん、現場スタッフの皆さんに改めて感謝申し上げます。来年を楽しみにしています。

※大辞林の引用は、Weblio「モデル」による

<http://www.weblio.jp/content/%E3%83%A2%E3%83%87%E3%83%AB>

(ひらいし かい・慶応大学)

2017年度「大学院生・若手研究者海外学会発表支援制度」の支援対象

日本社会心理学会 会長 浦光博

2017年度「大学院生・若手研究者海外学会発表支援制度」の支援対象について、規程に従って下記のように選考を行いました。研究支援担当常任理事・唐沢かおり氏(東京大学)を委員長とし、齋藤和志氏(理事:愛知淑徳大学)、池田浩氏(理事:九州大学)、小林知博氏(神戸女学院大学)、繁栞江里氏(青山学院大学)の各氏を委員とする選考委員会が構成され、慎重な審議をお願いしました。その結果、大学院生枠の応募件数9件の中から4名を、また若手研究者枠の応募件数3件については応募者全員を、それぞれ支援対象候補者として推薦することに決定しました。これについて、常任理事会および理事会にて審議の後、承認されました。ただし、大学院生枠の支援対象者4名のうち、お一人から辞退の申し出があり、最終的な支援者は下記に発表する3名となっています。

なお支援金額は、規定に従い「航空運賃の半額+学会開催日数×5000円」とします。支援対象者の皆さんは、発表の完了後、支援申請金額の根拠となる書類を添えて速やかに学会事務局に申請して下さい。

〈支援対象者(五十音順、敬称略)、発表題目、発表学会〉

1. 大学院生枠

- ・井関紗代(いせきさよ)名古屋大学大学院情報学研究科 D1

Feeling like this is mine: Psychological ownership mediates effects of haptic imagery and effectance motivation on willingness to pay.

(11th International Conference on Cognitive Science. Taipei, Taiwan.)

- ・喜入暁(きいれさとる)法政大学大学院人文科学研究科 D3

Psychopathy and relatively deprivation. (Society for Scientific Study of Psychopathy. Antwerp, Belgium.)

- ・中川裕美(なかがわゆみ)広島修道大学大学院人文科学研究科 D2

実在集団における内集団ひいきー社会的アイデンティティ理論と閉ざされた一般的互酬仮説の外的妥当性の検討ー

(The European Conference on Psychology and the Behavioral Sciences 2017. Brighton, UK.)

2. 若手研究者枠

- ・稲葉美里(いなばみさと)関西大学経済実験センター・ポスドクフェロー

Which type of sanctioning institution is the most attractive and effective?

(The 17th International Conference on Social Dilemmas. Taormina, Italy.)

- ・野崎優樹(のざきゆうき)京都大学大学院教育学研究科・特定講師

Applying the process model of emotion regulation to interpersonal emotion regulation among a working population.

(European Association of Work and Organizational Psychology 2017. Dublin, Ireland.)

- ・山脇望美(やまわきのぞみ)名古屋大学大学院教育発達科学研究科・研究員

Relationship between autistic traits and criminal offence in delinquent juveniles.

(Society for police and criminal psychology. San Diego, USA.)

日本社会心理学会第58回大会へのお誘い

広島大学 坂田桐子

日本社会心理学会第58回大会を、2017年10月28日(土)・29日(日)の2日間、広島大学で開催させていただくことになりました。広島大学での大会開催は今回で4回目となります。直近では、2010年に深田博己先生を大会委員長として第51回大会が開催され、教育学研究科付近の建物が会場となりました。今回は、同じ東広島キャンパス内ではありますが、総合科学研究科エリアが会場となります。

今回の大会は、2つの方針で運営したいと考えています。1つは、2014年の第55回大会(北海道大学)以来の流れを踏襲し、並行セッションを極力少なくすることによって、会員間の研究交流を最大限に促進することです。「会員同士が語り合うことで新しいアイデアが生まれる場」を提供したいと考えています。2点目は、「社会心理学の将来を考える」大会を目指したいと考えています。今や研究の「学際化」「国際化」「地域連携」は誰もがその必要性を認めるところとなっていますが、その流れの中で社会心理学はどのような役割を果たし、どのように成果を出せるのでしょうか。本大会準備委員会では、特に「学際化」に関わるイベントとして、新学術領域研究(複合領域)の研究者によるシンポジウムを企画しています。中でも、心理学・社会心理学分野とも関係が深いと思われる「意志動力学(ウィルダイナミクス)の創成と推進」及び「多様な『個性』を創発する脳システムの統合的理解」の2領域の研究者に話題提供を行っていただき、学際的研究の進め方やその成果について考えたいと思います。また、「国際化」に関わるイベントとして、大石繁宏氏(ヴァージニア大学)による特別講演を企画しています。また、大会前日に、広島社会心理学研究会(HSP)のスピノフ企画が予定されており、大石繁宏先生と若手会員向けに国際的に活躍している研究者の研究姿勢や考え方に直に触れる機会を提供したいと思います。「地域連携」についても企画ができるとよいのですが、あ



スペイン広場から見た総合科学研究科

まり準備委員会企画を増やすと方針の1点目「会員間の研究交流の促進」が達成できなくなりますので、この点については是非、会員の皆様のワークショップや研究発表をお願いいたします。他領域から、あるいは地域社会から社会心理学が何を期待されているのかを知ると共に、国際展開を含めたこれからの社会心理学のあり方について、皆様と共に考えたいと思います。

なお、今回の大会では、初日の夕刻のポスター発表会場で、飲み物と軽食を無料で提供する研究懇親会を開催いたします(一部のアルコール類に関しては代金を頂戴する可能性もあります)。是非ご参加いただき、気軽な雰囲気の中で楽しく研究交流していただければ幸いです。

・・・とここまでは通常のご案内です。本大会は、たまたま大会準備委員長が第28期・第29期の大会運営担当常任理事でもあるということから、もう一つの裏の方針を表明したいと思います。それは、今回の大会では「準備する側が負担感のない大会運営」を目指すということです。社会心理学会では数年前から大会開催校の選定が難航するという事態が続いており、準備を極力省力化することは非常に重要な課題だと考えられます。今回の大会では、準備委員会一同、効率化できるところは効率化し、あまり頑張らなくてもよいやり方を考えながら進めたいと思います。会員の皆様のご理解・ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

広島大学東広島キャンパスは、交通の面ではやや不便な場所にありますが、広々とした緑豊かなキャンパスで、ゆったりとした時間が流れています。大会当日の天気が良いければ、キャンパス内を散策していただくのもよいかもしれません。大学や研究を取り巻く状況は年々厳しくなる一方ですが、この2日間だけはゆ

っくりと研究について考え、研究へのチャレンジ精神を再認識していただける時間と空間を提供したいと考えております。2日間、研究について思う存分語り合える時間と場所を準備して、準備委員会一同、皆様のご参加をお待ちしております。



東広島キャンパスの紅葉

会員異動(2017年3月15日~6月20日)

入会

《正会員》

・一般会員

陳 艶艶(同志社大学文化情報学研究科研究助手), 泉 里子(東京大学医学部健康総合科学科特任助教), 江口正人(首都大学東京人文科学研究科心理学教室客員研究員), 大塚彩美(横浜国立大学大学院環境情報学府), 加藤隆広(愛知みずほ大学人間科学部教授), 鎌田雅史(就実短期大学幼児教育学科講師), 榎野 潤(労働政策研究・研修機構キャリア支援部門主任研究員), 木村ゆみ(愛知淑徳大学心理医療科学研究科), 栗原 茂, 古賀 豊(新潟大学人文学部/大学院現代社会文化研究科), 小玉一樹(福山平成大学経営学部経営学科教授), 小浜駿(宇都宮共和大学シティライフ学部専任講師), 下坂 剛(四国大学生生活科学部生活科学科准教授), 新造一正(サンキ・ウエルビー株式会社), 塚常健太(KDDI 総合研究所インタラクティブデザイングループ研究員), 中川紗江(同志社大学心理学部こころの科学研究センター嘱託講師), 西岡直実(ミッドポイント・ワークラボ代表), 西舘奏江(三菱スペース・ソフトウェア株式会社人事部), 松岡弥玲(愛知学院大学心身科学部講師), 向日恒喜(中京大学経営学部教授), 山元修一(宮崎県警察本部刑事部科学捜査研究所技術職員心理・犯罪分析係), 脇田和美(東海大学海洋学部海洋文明学学科准教授)

・大学院生

相羽将智(広島大学大学院総合科学研究科), 青山美樹(日本大学大学院総合社会情報研究科), 阿久津豪史(学習院大学大学院人文科学研究科), 李 受珉(広島大学大学院教育学研究科), 飯野麻里(北海道大学大学院文学研究科), 池内はるか(安田女子大学大学院文学研究科), 伊崎 翼(広島大学大学院総合科学研究科), 今井田貴裕(甲南大学人文科学研究科人間科学専攻), 上原将剛(帝京大学大学院文学研究科臨床心理学専攻), 岡村靖人(追手門学院大学大学院心理学研究科), 賈 舒婷(広島大学大学院社会科学部研究科マネジメント専攻), 貴島侑哉(国立大学法人 福岡教育大学教育学研究科学校教育創造コース教育心理専攻), 木村拓真(神戸大学大学院人間発達環境学研究科), 後藤祐起(滋賀大学大学院教育学研究科), 後藤凜子(九州大学大学院人間環境学府行動システム専攻心理学コース), 小西浩司(放送大学大学院 文化科学研究科), 小林梨紗(立正大学大学院心理学研究科 対人・社会心理学専攻), 齋木 彩(明治学院大学大学院心理学研究科心理学専攻), 佐藤研一郎(中央大学大学院文学研究科), 佐藤俊雄(東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻), 柴田侑秀(同志社大学大学院心理

学研究科), 鈴木啓太(東京大学大学院人文社会系研究科社会文化専攻社会心理学研究室), 高田秀樹(文京学院大学大学院人間学研究科), 高松礼奈(名古屋大学大学院教育発達科学研究科), 瀧森 渉(帝京大学大学院文学研究科臨床心理学専攻), 張 凱(奈良女子大学大学院人間文化研究科), 張 鳳芝(北海道大学大学院文学研究科), 覃 宝妮(広島大学大学院教育学研究科), 戸高美佳(追手門学院大学大学院心理学研究科), 中村 聖(帝京大学大学院文学研究科臨床心理学専攻), 西村悠人(広島大学大学院総合科学研究科), 西村友佳(関西学院大学文学研究科), 樋口浩一(放送大学人間発達科学プログラム), 廣瀬竜太郎(立正大学大学院対人・社会心理学研究科), HU Anqi(名古屋大学大学院教育発達科学研究科), 古橋健悟(名古屋大学大学院教育発達科学研究科), 堀遼太郎(明治学院大学大学院心理学研究科心理学専攻), 馬 萌(広島大学大学院総合科学研究科行動科学講座), 前田 楓(安田女子大学大学院文学研究科), 宗像 愛(千葉大学人文公共学府), 叶 茂鑫(東北大学大学院文学研究科行動科学研究室), 横井良典(同志社大学大学院心理学研究科), 横山実紀(北海道大学大学院文学研究科), 吉川ひかる(北海道教育大学大学院教育学研究科), 李 晶晶(東京女子大学大学院人間科学研究科), 梁 庭昌(広島大学大学院社会科学研究科マネジメント専攻), 林 楚悠然(筑波大学大学院人間総合科学研究科), SUMLUT Roi Sawm(国際基督教大学大学院心理学・アーツ・サイエンス研究科)

《準会員》

馬 景昊(立教大学現代心理学部心理学科), Wilkes Hanna

退会

足立邦子, 穴田義孝, 安随友和, 安藤理美, 飯田洋市, 石原留美, 伊藤洋輔, 稲垣勝之, 犬塚智咲子, 井ノ川侑果, 大野木裕明, 小形佳祐, 押見輝男, 落合萌子, 兼高聖雄, 蒲池和明, 岸本陽一, 金城正典, 高 遠, 江 暉, 近藤芳樹, 佐伯政男, 坂井絵里香, 佐藤浩輔, 鹿内啓子, 下津佐綾, 杉山顕寿, 鈴木康平(物故), 趙 善英, 手塚紀子, 寺井あすか, 照屋佳乃, 土井孝典, 中里至正, 中島一稀, 中嶋佳苗, 中西彩之, 新美明夫, 仁科信春, 野口友希, 羽倉英美, 林 文, 引地博之, 吹田 光, 光藤優花, 三戸千穂, 御堂岡潔, 盛恵理子, 守 一雄, 森下右知代, 矢野伸裕, 矢野宏光, 矢守克也, 吉崎雅基

所属変更

高比良美詠子(立正大学心理学部対人・社会心理学教授), 中西大輔(広島修道大学健康科学部), 石井宏典(茨城大学人文社会科学部), 坂本 剛(名古屋産業大学現代ビジネス学部教授), 針原素子(武蔵大学社会学部メディア社会学科准教授), 樋口収(明治大学政治経済学部専任講師), 鈴木 勇(大阪成蹊大学教育学部准教授), 鈴木信幸(亜細亜大学都市創造学部), 有光興記(関西学院大学文学部), 中里直樹(日本学術振興会特別研究員 PD(広島大学大学院教育学研究科)), 鈴木文月(日本工学院八王子専門学校講師), 橋口捷久(福岡県立大学名誉教授), 立脇洋介(九州大学基幹教育院准教授), 高林久美子(東京女子大学人間科学研究科博士後期課程), 辻竜平(近畿大学総合社会学部教授), 三沢良(岡山大学大学院教育学研究科), 豊沢純子(大阪教育大学教育学部教育協働学科), 横田晋大(広島修道大学健康科学部心理学科准教授), 河村真千子(麗澤大学), 若尾良徳(日本体育大学), 岡田陽介(拓殖大学政経学部), 森泉哲(南山大学国際教養学部), 繁樹算男(慶應義塾大学社会学研究科訪問教授), 塩谷尚正(関西国際大学人間科学部講師), 澤海崇文(流通経済大学社会学部国際観光学科助教), 玉宮義之(白鷗大学教育学部), 井邑智哉(佐賀大学大学院学校教育学研究科), 古村健太郎(弘前大学人文社会科学部), 縄田健悟(福岡大学人文学部), 中村慎佑(関西大学非常勤講師), 上淵寿(早稲田大学教育・総合科学学術院), 加藤樹里(金沢工業大学情報フロンティア学部心理情報学科助教), 稲垣(藤井)勉(鹿児島大学学術研究院法文教育学域教育学系/教育学部 講師), 井上裕珠(帝京大学経済学部経営学科), 塚本早織(愛知学院大学教養部講師), 井川純一(大分大学経済学部准教授), 津村健太(帝京大学理工学部総合基礎科目講師), 後藤崇志(滋賀県立大学人間文化学部助教), 平島太郎(愛知淑徳大学心理学部講師), 中嶋智史(広島修道大学), 横山智哉(立教大学社会学部メディア社会学科助教), 中分 遥(University of Oxford, Institute of Cognitive and Evolutionary Anthropology 博士研究員), 稲葉美里(関西大学ソシオネットワーク戦略研究機構経済実験センターポスト・ドクトラル・フェロー), 中山 真(鈴鹿大学こども教育学部), 安部健太(学習院大学計算機センター), 工藤大介(公益財団法人大原記念労働科学研究所研究部システム安全研究グループ常勤研究員), 日道俊之(高知工科大学総合研究所フューチャー・デザイン研究センター助教(ポスドク研究員)), 塩谷芳也(京都産業大学現代社会学部助教), 正木郁太郎(東京大学大学総合教育研究センター特任研究員), 上條菜美子(東京成徳大学応用心理学部臨床心理学科助教), 嘉瀬貴祥(立教大学現代心理学部助教), 澤山郁夫(兵庫教育大学大学院学校教育研究科助教), 紀ノ定保礼(静岡理工科大学情報学部講師), 藤井貴之(玉川大学脳科学研究所嘱託研究員), 市川玲子(株式会社イデアラボ博士研究員), 泉 愛(九州大学附属芸術工学図書館), 吉野伸哉(早稲田大学大学院文学研究科人文科学専攻心理学コース), 櫻井良祐(北海道教育大学教員養成開発連携センター特任講師・東京大学大学院人文社会系学研究科), 永野惣一(筑波大学大学院人間総合科学研究科生涯発達科学専攻博士後期課程), 玉利祐樹(静岡県立大学講師), 五十嵐正毅(大東文化大学経営学部経営学科准教授), 宮川愛由(京都大学レジリエンス実践ユニット特任准教授), 天野美穂子(東京交通短期大学)

専任講師), 小林 翼(株式会社住環境計画研究所研究員), 本郷亜維子(東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻博士後期課程), 藤園佐智世(障がい児通所支援事業所 ひなたぼっこ心理士), 小谷恵(アサヒグループホールディングス(株)コアテクノロジー研究所), 大高実奈(東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻), 中山賢二(武蔵野大学大学院通信教育部人間学研究科), 藤田浩之(名古屋大学教育発達科学研究科), 石川咲子(清水区役所清水福祉事務所生活支援課), 木川智美(昭和女子大学大学院生活機構研究科生活機構学専攻博士後期課程), 一言英文(福岡大学人文学部文化学科講師), GHERGHEL Claudia(名古屋大学教育発達科学研究科心理発達科学専攻), 高橋伸彰(佛教大学教育学部臨床心理学科講師), 横山新一(明治大学研究・知財戦略機構)

『社会心理学研究』掲載予定論文 (2017年6月24日掲載決定分)

第33巻第1号(2017年8月刊行予定)

《資料》

田村美恵「メタステレオタイプの情報が集団間態度と内集団認知に及ぼす影響:メタステレオタイプの情報の望ましさ,及び,自集団ステレオタイプとの一致度に注目して」

編集後記

第29期広報委員会体制となって初めての会報をお届けします。過去の会報のレイアウトとにらめっこしながらの地道な作業でした。自分で編集したレイアウトがそのまま完成原稿になるという作業は久しぶり。この地道な作業を進めているうちに,自分が修士論文や博士論文の1ページ1ページを編集していた頃のことを懐かしく思い出しました。次号以降では,もう少し写真を豊富に掲載した会報になるよう心がけてみます。(宮本 聡介)